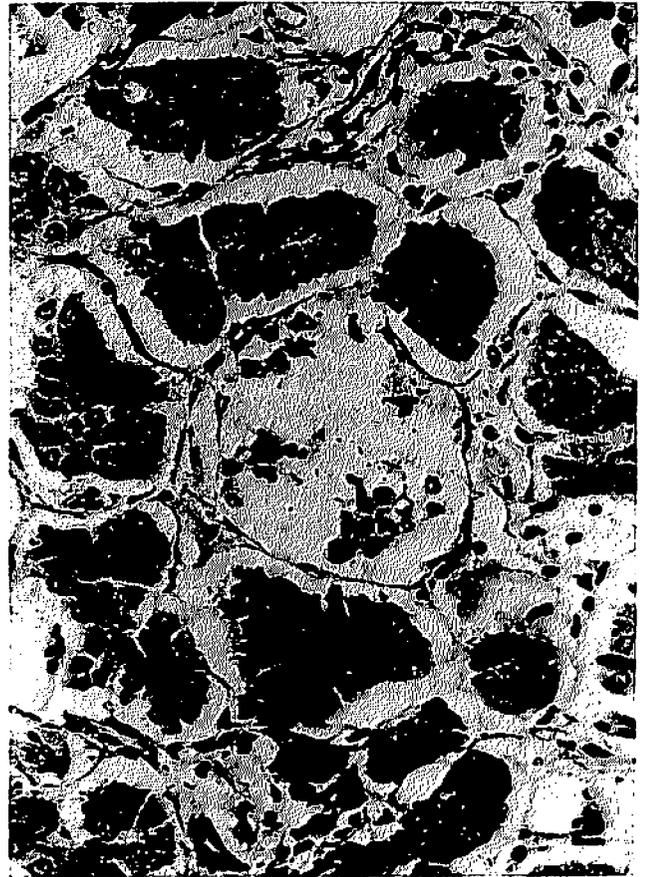


# 猫の膵

山口大学農学部家畜病理学教室出題 第24回獣医病理学研修会標本No.417



動物：シャムネコ，去勢雄，12-13歳。

臨床的事項：昭和57年4月17日，口内炎（好酸球性肉芽腫）を治療。昭和58年2月より口をゆがめて歯ぎしりをするようになったため，開業獣医師のもとで治療を受けた。その後，食欲は旺盛であったが，徐々に削瘦した。昭和58年11月18日，起立不能となり，本学付属家畜病院へ来院。体温：33.2°C，脈拍数：144/min。脱水が著明で，心音やや弱かった。血液検査——RBC：532万/mm<sup>3</sup>，WBC：5500/mm<sup>3</sup>，PCV：29%，TP：11.0g/dl，Glucose：392mg/dl。尿検査——pH6，Sugar：1~290mg/dl，比重：1.018。補液により症状はある程度改善されたが，翌日早朝斃死した。

剖検所見：膵は淡黄色で萎縮し，表面は顆粒状で，剖面では小葉構造が認められた。腎は左右とも血量乏しく，軽度に硬化。包膜剥離良好であった。剖面では三層境界不明瞭。腎盂には濃汁の貯溜を認めた。肝は赤褐色で軽度にうっ血し，小葉像明瞭であった。その他の臓器には著変を認めなかった。

病理組織学的所見：全体に間質には結合織の増生が著明で，小葉構造が明瞭であった。また，このような間質

結合織は実質の一部へも侵入して偽小葉様の構造を形成し，渡辺鍍銀染色により，好銀線維の発達を認めた。線維化の重度の部位では，実質細胞の萎縮・変性が著明であった（Fig. 1, ×20）。

病変は膵島にも見られ，水腫様に変性した膵島が痕跡的に残存するだけで，正常な膵島細胞は認められず，また，アザン染色によってもβ細胞は不明瞭であった（Fig. 2, ×200）。さらに，今回の症例では，これらの退行性変化とともに，老年性変化と思われる腺房細胞の結節性増生および腺房中心細胞の増殖が特徴的に見られた。

膵管の粘膜下織には，リンパ球・形質細胞を主体とした細胞浸潤が見られ，このような炎症は，付近の間質あるいは実質にも波及し，実質組織の破壊も見られた。

膵臓以外では，消化管全体の慢性炎症と，腎・脾の血管壁と心臓の冠動脈壁の肥厚，心筋線維の変性を認めた。

臨床的に見られた糖尿病は，膵島-β細胞の障害によるものと考えられ，また，全身性に見られた血管系の病変は，糖尿と何らかの関係があるものと思われたが，その詳細については明らかでなかった。

病理組織学的診断：慢性増殖性膵炎（膵硬変）。